

薬師寺旧境内の調査

—第489次

1 はじめに

今回の調査は、薬師寺収蔵庫新築にともなう発掘調査である。調査地は玄奘三蔵院の西方約30mに位置し、平城京条坊では右京六条二坊九坪に相当する薬師寺の苑院推定地にあたる。中世以降は、調査地一帯に薬師寺の子院が建ち並んでいたとされ、17世紀中頃の「伽藍寺中并阿弥陀山図」によれば、福蔵院の境内に位置する。調査は2012年1月16日に開始し、2月24日に終了した。面積は210㎡である。なお、土盛り確保のため、2回にわけて調査をおこなった。

周辺では、約30m東に昭和58年度調査区（『58年平城概報』）が、約20m北には第293-8次調査区（『年報1999』）があり、井戸や建物など平安時代～中世の遺構を中心として、南北溝SD2720など、奈良時代に遡る可能性のある遺構も検出されている。

2 調査成果

基本層序は、玄奘三蔵院造営に伴う造成土（160～200cm）、旧耕作土（15～30cm）、床土（5～15cm）、地山（灰色砂）



図187 第489次調査区位置図 1:4000

の順。遺構はすべて地山直上で検出した。

主な遺構としては、古代の掘立柱建物1棟、自然流路1条、古代～中世の遺物を含む溝2条、中世の井戸1基、土坑2基などである。そのほかには中世～近代の耕作溝、土坑、ピットなどがある。

掘立柱建物SB3010 梁行2間、桁行4間以上の南北棟掘立柱建物。柱間は梁行が2.7m（9尺）、桁行が2.1m（7尺）。柱掘方は一辺約0.9mの隅丸方形。北妻中心の柱は、後述する南北大溝SD3015によって破壊されており、西側柱の南方の柱穴2基も後述する自然流路SD3017により失われたと考えられる。柱掘方には遺物を含まず、詳細な時期は不明だが、柱掘方の規模や形状から古代の可能性が大きい。また、柱穴の位置関係のほか、柱掘方の形状や埋土の類似性から一連の建物と判断したが、調査区西壁にかかる南北柱穴3基が東西棟建物の東妻で、東方の南北柱穴5基が塀と解釈することも不可能ではない。

自然流路SD3017 調査区西壁南部で確認された自然流路。幅5m以上。埋土には有機物を含むが、遺物を含まない。SB3010の西側柱南方の柱穴2基を破壊し、SD3015に壊される。SD3017は調査区西壁の地山面および東壁断面では確認できないことから、SD3015と重複して大きく蛇行すると考えられる。

土坑SK3011 調査区東南部で検出した。直径0.4m、深さ約40cm。規模は小さいが、埋土からは11世紀末～12世紀初頭頃の大量の土器や瓦が一括して出土した。

東西溝SD3012 調査区北方で検出した幅0.8m、深さ50cmの東西溝。SD3015に壊される。埋土には13世紀後半までの土器や瓦などの遺物を多く含む。

井戸SE3013 調査区中央部で検出した素掘りの井戸。西半分はSD3015によって破壊される。直径1.4m、深さ130cm。出土遺物から11世紀後半の井戸と考えられる。

土坑SK3014 調査区中央東部で検出した土坑。直径1.7m、深さ60cm。断面は底部に向かってすぼまる鉢形を呈し、底面が径0.5mの円形になる。曲物などによる井戸枠の痕跡と解釈すれば、井戸の可能性もある。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

南北大溝SD3015 調査区を南北に縦断する素掘溝。幅3.1～4.0m、深さ120～140cmで断面V字状を呈する。砂質の軟弱地盤のためか、数回にわたる掘り直しや浚渫の痕跡が確認できる（図189）。埋土には、中世の土器や、奈

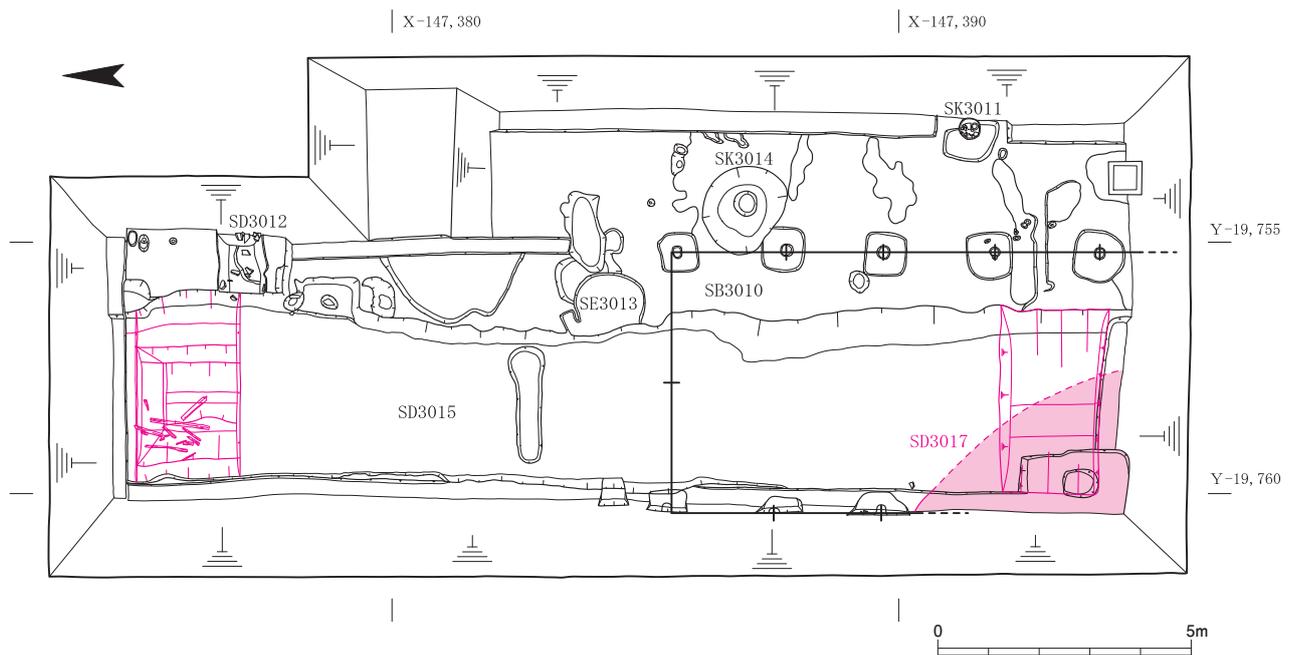


図188 第489次調査遺構図 1:150

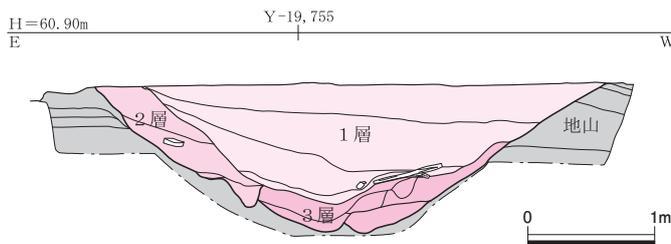


図189 SD3015断面図 1:60

良時代～中世の瓦、木製品等が出土した。SD3015は、その位置から第293-8次で検出した南北溝SD2720と一連の可能性はある。ただし、SD2720は中世の掘立柱建物が掘り込まれる整地土の下層で検出されており、埋土上層には瓦質土器を含むものの、奈良時代の土器も一定量出土する。これらから、SD2710は奈良時代～中世に存続した溝の可能性が高い。一方、SD3015には奈良時代の土器を含まず、古代の建物SB3010や中世の遺構であるSD3012やSE3013を破壊する。したがって、現時点ではSD3015はSD2710とは別の中世の溝という解釈が妥当と思われる。(石田由紀子)

3 出土遺物

土器・土製品 埴輪や奈良時代の土器少量と、中世の土器が多数出土した。ここでは一括性の高いSK3011と、遺構の年代に関わるSD3012、SD3015を中心に述べることにする(図190)。

SK3011からは完形品に近い土師器皿、瓦器皿・椀が出土した。11世紀末～12世紀初頭頃の良い資料である。1～6は「て」の字口縁の小皿で、口径は10～11cm。

7・8は土師器皿。口径は15cm前後。口縁端部は二段ナデする。14はもうひとまわり大きく、口径17.2cm。口縁端部は一段ナデ。9～11は瓦器皿。規格性が高く、内外面のミガキは精緻である。瓦器椀は口径から大小に分かれる。12は口径10cm程度の小型のもの。点数は少ない。13・15～18は口径12cmの瓦器椀。

SD3012は土師器皿や瓦器を含む。やや年代幅を持つものの、瓦器椀は川越編年Ⅱ-Bまでの瓦器を含み、12世紀後半に下限を求めることができよう。19～24は土師器皿で、20～21は2層、それ以外は下層出土。25～27は瓦器椀、下層出土。25は二重高台である。

SD3015出土土器は、SD3012よりも新しく、下層は13世紀頃の土師器皿や瓦器が中心であるが、上層に15世紀以降に降る土釜や瓦質土器が多数出土した。28・29は口径10cm前後、30は口径14cm前後の土師器皿。31は瓦器小椀。32は大和Ⅰ型の土釜。33～37は瓦質土器。33は桜花文、34は唐草文、35は珠文と唐草文、37は菊花文の押印がある。すべて第1層出土。36は風炉。

38はSE3013下層出土で、甕形で外面にタタキをもつ。上層は川越編年Ⅲ-E期の瓦器椀を含む。(神野 恵)

瓦磚類 薬師寺の創建瓦を含む軒丸瓦11点、軒平瓦9点、丸瓦が516点(62.5kg)、平瓦が3273点(250.4kg)、鬼瓦1点、面戸瓦1点、雁振瓦1点、磚1点が出土した。ここでは型式が判明した軒瓦を報告する(図191)。

1は薬師寺18型式(6304Eb)。全体的に摩滅が著しい。奈良時代前半。2は薬師寺47型式。複弁八弁蓮華文軒丸瓦で平安時代中期。3は薬師寺88型式で四葉宝相華文軒

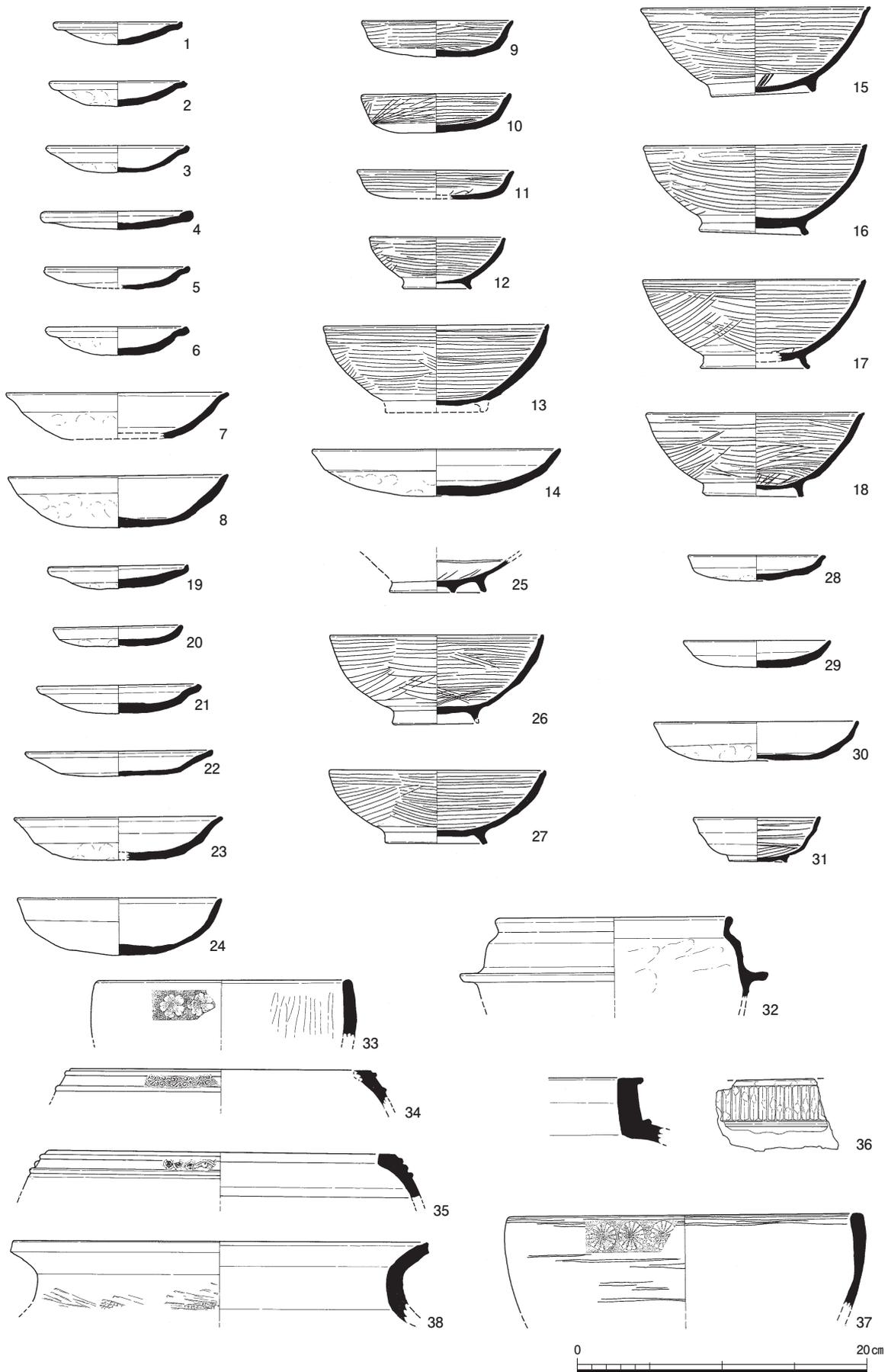


図190 第489次調査出土土器 1 : 4 (33~35、37・38は1 : 6)

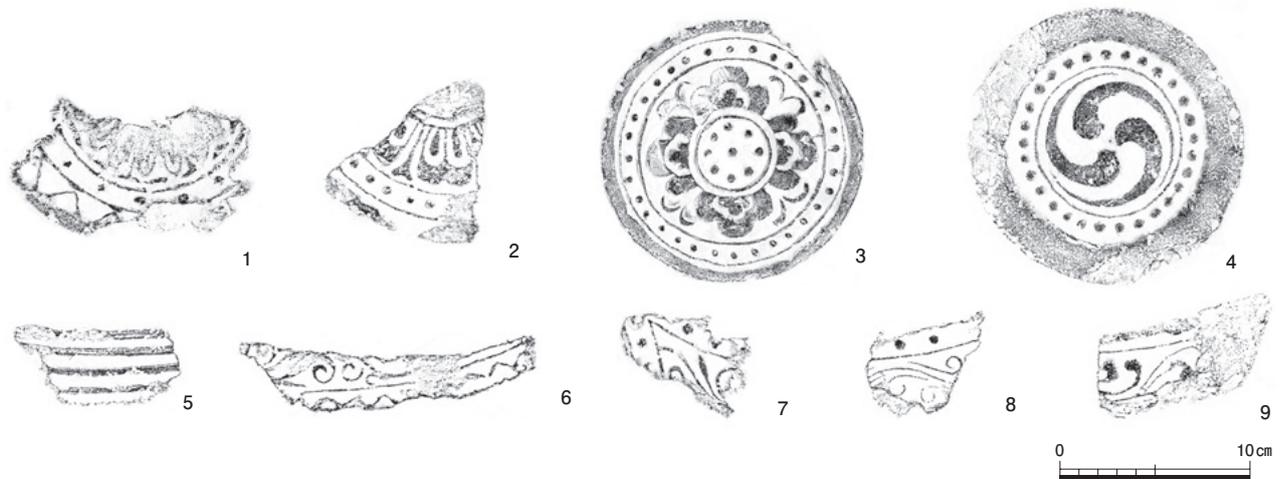


図191 第489次調査出土軒瓦 1 : 4

丸瓦。比較的小型で瓦当径は8.9cm。平安時代後期。4は薬師寺128型式で右巻三巴文軒丸瓦。中心に小円点が痕跡程度に残り、巴尾部が圏線に取り付かない。瓦当径は14.4cm。室町時代前半。薬師寺128型式はSD3015からもう1点出土した。5は五重弧文軒丸瓦。第五弧線が欠損する。重弧文は型挽きによるもので、平瓦部凹面に側板圧痕があり、古い特徴をもつ。奈良時代前半と考えられる。これまでの薬師寺の調査では、三重弧文軒平瓦（薬師寺209型式）は出土していたが、五重弧文軒平瓦の出土例はない。6は薬師寺202型式（6641H）。奈良時代前半の薬師寺創建瓦である。7は薬師寺219型式（66640）。上下外区および脇区に珠文をもつ均整唐草文軒平瓦。奈良時代前半。8は薬師寺36型式。段顎をもち、薬師寺創建瓦に似るが、平安時代前期の復古瓦である。8は均整唐草文軒平瓦。これまで薬師寺での出土例はないが、興福寺食堂で同範資料がある（奈文研『興福寺食堂発掘調査報告』、1959）。平安時代後期。1は包含層、3はSK3011、それ以外はSD3015の1層から出土した。（石田）

金属器 板状鉄製品1点、鉄角釘片1点が出土し、冶金関連遺物としては、羽口片3点、鉄滓片2点、銅滓1点、窯壁片と思われるもの2点がSD3015から出土した。

木製品 木製品には柿板と思われる厚さ5mm以下の板材が数多く含まれ、柿板は大きいもので長さ約60cm、幅約7cm。このほか部材片と見られる角材片があり、柄穴をもつものもある。これらのほとんどがSD3015から出土した。

石製品 砥石が5点出土した。図192は提砥。表裏面を砥面とし、片側は大きくくぼむ。下半は欠損する。砂岩製。図示したもの以外は礫の一面を砥面として用いたものである。すべてSD3015の1層から出土した。（芝康次郎）

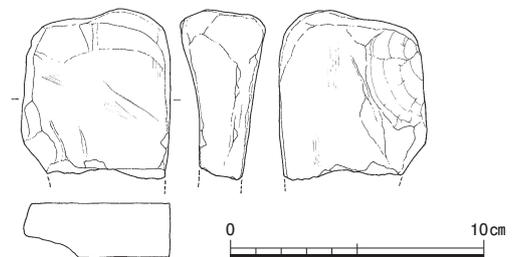


図192 SD3015出土砥石 1 : 3

4 まとめ

薬師寺苑院推定地で古代の建物と考えられる掘立柱建物SB3010を検出した。詳細な時期は不明なもの、奈良時代における苑院、あるいは薬師寺の附属院地に関わる遺構は、これまでほとんど発見されておらず、きわめて重要である。

また、SD3012やSD3015、SK3011など、平安時代～中世の遺構を確認し、子院が建ち並んでいたとされる調査地周辺の様相の一端を知ることができた。特にSK3011から出土した土器や軒丸瓦は、11世期末～12世期初頭までと一括性が高く、当該期における土器様相を知る上で重要な成果となった。

SD3015の解釈に関しては、その位置から南北寺内道路（西二坊坊間西小路相当）の東側溝、奈良時代の苑院、中世以降の子院を区画する溝などいくつかの案が考えられる。ただし出土遺物からみても、現時点では中世の溝と考えざるをえず、奈良時代の遺構とする根拠はうすい。ここでは中世の子院を区画する溝と解釈しておきたい。溝の断面がV字状を呈すことを重視すれば、排水機能だけでなく、水濠のような防衛機能も兼ねていた可能性がある。（石田）